



前橋四公の城下町を歩く

Vol.5

番外編 上泉伊勢守・滝川一益

文化国際課
027-898-6992

江戸時代に現在の市域内を治めた「前橋四公」の城下町を紹介してきた本シリーズ。最終回の今回は番外編。四公の時代から少しさかのぼり、戦国時代に活躍した前橋ゆかりの2人の名武将を紹介します。

新陰流の流祖

「剣聖」上泉伊勢守

上泉伊勢守は、1508年、上泉城に生まれたといわれています。戦国時代、箕輪城主・長野氏に仕え、その武勇を武田信玄に認められ、仕官を勧められましたが断り廻国修行。このとき信玄から名を与えられ、上泉秀綱から信綱に変えたといわれています。自らが創出した新陰流を足利13代将軍・義



上泉城跡に建つ上泉伊勢守銅像

輝や正親町天皇に披露。最高の技を柳生宗厳(石舟斎)に印可相伝。柳生石舟斎・

宗矩親子は徳川家康に仕え、家康は戦国の世に終止符を打ち、平和をもたらしました。そこには、兵法柳生新陰流の「天下統御の剣」の精神が流れていたといわれています。軍師として「上泉流軍学」も完成した上泉伊勢守は、日本の剣道史にさんぜんと輝く兵法家。新陰流の流祖で、「剣聖」とうたわれました。

● 西林寺

上泉伊勢守の菩提所。本堂裏には、信綱と伝えられる墓があります。

す。また、没後400年に建立した、内閣総理大臣・福田赳夫の揮毫による「剣聖 上泉伊勢守 藤原信綱顕彰之碑」があります。



西林寺

織田信長の四天王・滝川一益

1592年3月、武田氏を滅ぼした信長は、一益を関東管領に任じ、上野国と信濃国小県・佐久二郡を与えました。一益は、厩橋城を拠点に関東平定を行おうと、5月に配下となった諸将を城に招き、自ら能「玉鬘」の仕舞を披露。6月には長昌寺に能舞台を作り、本格的な能興行を催しました。これが、記録に残る県内初の演能です。一益が能を舞って見せたのは、文武兼ね備えた支配者であることを誇示したもので、上野国の諸将は、領主として一益を受け入れました。しかし、本能寺の変が起こり、一益は配下の諸将を従え、上野・武蔵国境の神流川で北条軍と対決。

● 長昌寺

1489年、長野方業が厩橋城を築くとともに城内に創建した寺。1581年に焼失し、城主の北条高広が現在地に再建しました。境内には、書家・金澤翔子氏が揮毫した群馬県能発祥の地の碑があります。



群馬県能発祥の地碑(長昌寺)

上泉・滝川 歴史観光ガイド

前橋橋市民学芸員が剣聖上泉伊勢守コース(上泉城跡、西林寺、玉泉寺など)か龍海院・長昌寺コース(龍海院~殿島神社~長昌寺~清光寺)を案内します。

日時=11月15日(日)10時~12時
対象=一般、各コース先着20人
申し込み=10月12日(月)~26日(月)に文化国際課

027-898-6992へ

いきいき まえばし人

群馬大映画部部长

熊谷宏彰さん・21歳

荒牧町四丁目



学生映画で多くの人を元気に

昨年10月に群馬大で映画部を立ち上げた熊谷さん。初代部長として学生映画の制作準備中にコロナ禍に巻き込まれた。

「大学は休講になり、映画制作といった学生の活動も長期にわたって大きな制約を受けました」

自宅待機を続けていたが、全国の大学で同様に映像制作の部活動が制限されている現状を知った熊谷さん。大学生の一人として、何とか学生の創作活動をサポートしたいと考え、行動を始めた。

「全国の大学生に希望をテーマにした1分以内の映像作品の制作を呼び掛け、自粛期間中でも僕たちの創造性の自由

が失われていないことや、若い世代の熱意を全世代に示したいと思いました」

呼び掛けに応じた全国の大学から寄せられた180作品をリモート編集。194分の長編オムニバス映画「突然失礼致します!」を8月に動画投稿サイトYouTubeに公開した。

「全国の多くの仲間の協力で、コロナ禍の中、1本の映画を合同制作できました。今後は劇場での上映も予定しています」

制限が残る中、精力的に活動する熊谷さん。きっとこれから映画をとおして多くの人に元気を届けていくだろう。

萩原朔美 河畔奇譚



vol.19

前橋文学館
027-235-8011

今回は、前橋文学館長・萩原朔美のコラムをお届けします。 **新型コロナウイルス感染症と日常**

日常で変化したのは、よく散歩するようになったこと。街を一冊の本として読むこと。それが散歩の醍醐味だ。車で移動すると、街は手段になってしまふ。歩けば、街は目的に変わる。

前橋の街を歩いていると、何が起きたのか、何が起きているのか、何が起きないのか、何がリアルに伝わってくる。変わりがたくないと願っている人、変わらないうために変わろうとしている人の息吹きが、街の



佇まいに表現されているように感じられる。

最初は、ただ歩くだけだったけれど、この頃は携帯で撮影するようにしている。その写真をSNSやWEBマガジンに連載している。そうなるって、散歩だけがロケハンだから分からない。何か写真的に面白い風景はないかと、目をギラギラさせてうろついている始末。撮影が目的になってしまったのだ。

一番気に入った風景は、私がかつどの頃に住んでいた街並みを思い出させてくれる場所だ。いつの間にか消えてしまった昭和との出会いはうれしい。昭和記念として保存してほしいなど勝手に思うのは、旅行者の発想だ。

今年、私は母親の家を解体してしまった。何人かの知人に保存してほしいと言われた。住んでいる者にとっては、保存より生活を優先させてしまふ。

だから、私の撮影散歩は、自戒の念を孕んでますます熱心になるのである。

萩原朔美